

人をつなぐシステムを競争優位確立の源泉へ 「C3コンセプト」を掲げるOKIのUCとは

競争優位を確立するには、全社最適化を視野に入れた高度なユニファイドコミュニケーション(UC)が欠かせない。十余年前から、その実現に取り組んできた沖電気工業(以下、OKI)では、その間に培った実績とノウハウを製品に反映し、ユーザーに提供。「Contact(つながる)」「Communication(伝わる)」「Convergence(統合できる)」からなる「C3コンセプト」を提唱し、企業のシステム整備、競争力向上を支援している。

競争優位確立を支援するための「C3コンセプト」を提唱

内部統制の強化、コンプライアンスに基づく企業の社会的責任の増大、事故や災害に備えた事業継続性の確保、ビジネスのグローバル化の進展、人口減による少子高齢化など、近年、企業を取り巻く経営環境が大きく変化している。「そうした中、継続的な成長を目指すには競争優位を確保することが不可欠。それを実現するため、OKIでは、データや音声など様々なコミュニケーション手段をIPネットワークに統合するユニファイドコミュニケーション環境の構築を支援しています。こうした環境整備



によって「意思決定の迅速化」「顧客満足度の向上」「生産性の向上」「リスクマネジメントの構築」という、成長に欠かせない4つの要件を満たし、市場競争力を強化するのです」とOKIの坪井 正志氏は指摘する。

同社は、そのユニファイドコミュニケーションのあるべき姿を「C3コンセプト」として提唱。具体的には「Contact(つな

がる)」「Communication(伝わる)」「Convergence(統合できる)」という3つの要素を掲げ、それを安心・安全に実現することを目指している。

長年の実績、自社運用の知見をユーザー企業に還元

ここで注目したいのが、同社が、ユニファイドコミュニケーションを、単なるデータや音声の統合と捉えるのではなく、端末の先にある「人」の自然かつ円滑なコミュニケーションを支援することで、先の4つの要件を実現しようと考えていることだ。

「そのためには、企業システム全体を視野に入れたコミュニケーション環境の最適化を図り、個人の生産性向上だけでなく、組織としての生産性向上を目指す必要があります」と同社の西田 慎一郎氏は強調する。この主張は、長年にわたってユニファイドコミュニケーションの実現に取り組んできた同社の経験から生まれたものである。

実際、同社は、当時国内初の企業向けVoIPゲートウェイであった「BS1100」に加え(※1)、ユニファイドメッセージングシステム「CTstage」を、1996年に発表。2000年には国内初のIP-PBX「IPstage」の提供を開始するなど(※2)、IPテレフォニーの黎明期より市場を支えてきた。「つまり、当社の提唱する『C3コンセプト』は十余年に及ぶユニファイドコミュニケーションの実績とノウハウを集大成したものでな

のです」と坪井氏は話す。

そして、これらの製品群は、「C3コンセプト」に基づき現在も進化を続けている。具体的には、ユニファイドコミュニケーションの中核を担うIPテレフォニーサーバー「SS9100」に加え、IPテレフォニー、ソフトフォン、IPコンタクトセンター、ビデオ会議、セキュリティ&モビリティの各分野で豊富な製品を提供。それぞれがVoIPベースの標準的な通話制御プロトコルである「SIP」に対応しているため、シームレスに連携が可能だ。ニーズに応じ、組み合わせて導入することでコンタクトセンター連携やビデオ会議連携など、高いレベルで全社的なユニファイドコミュニケーションを実現できる。

しかも、これらの製品は同社自身が自社でビジネスに活用しながら、常に見直しが行われている。例えば、「Com@WILLソフトフォン」はOKI社内で、日常的に使われており、離れた拠点で気軽にテレビ電話による打ち合わせを行うなど、業務の効率化に役立っている。一部の部署では、Com@WILLソフトフォンを活用し、ネットワークによる在宅勤務も試験的に行われており、技術・製品だけでなく利活用の中でも、そのノウハウをユーザー企業に還元しようと考えている。

既存資産を有効活用しつつシステムの段階的拡張も可能

「C3コンセプト」に基づいた製品群は、既存資産を有効活用できる点も大きな特長といえる。例えば、SS9100は、公衆電話網をベースにした一般・多機能電話機、FAX、PHS端末などの既存端末と、IP電話機、3G/無線LANデュアル端末といった先進的なIP端末の共存を可能にする。また、VoIPゲートウェイ「IVGシリーズ」は、既存の音声ネットワークをIPネットワーク上にSIPで接続でき、同じく「BV8000IWG」は音声および動画通信のVoIP通信プロトコルとして広く利用されている

図2 現在のOKIのユニファイドコミュニケーション製品群



IPテレフォニーサーバー「SS9100」を中心に豊富な製品群を提供。主要製品には高品位な音質/映像技術「eおと」「eえいぞう」を実装。さらに各製品はSIP連携が可能で、シームレスなコミュニケーション環境を実現できる。



「H.323」とSIPネットワークの相互接続を実現する。このCTstageやCom@WILLなどのAPIは広く公開されており、CRMシステムや業務アプリケーションとの連携実績も豊富にある。

「こうした特長を活かせば、一度に全社的なシステムをリプレースするのではなく、既存の資産を流用しつつ、段階的により高度なユニファイドコミュニケーション環境へと発展させていくことができます。企業ニーズに合わせてスモールスタートが可能のため、導入コストを最適化でき、費用対効果を高める上でも有効でしょう」と西田氏はそのメリットを述べる。

その好例ともいえるのが、産業用ゴム製品メーカーの十川ゴム社の導入事例だ。同社では、数年前からVoIPゲートウェイを導入し、社内内線電話のIP化に着手し、通信コストの削減を図ってきたが、今後の成長を見据え、より高度なコミュニケ

ーション環境と可用性の向上が必要と判断。IPテレフォニーサーバー「SS9100」を導入し、内線電話の統合を進め、さらには、各拠点のPBXをIP&モバイルビジネスホンの「IPstage MX/SX」にリプレースし、SS9100とのSIP接続を実現。既存の内線の番号体系を維持したまま、社内全域でストレスを感じないスムーズなIPコミュニケーションの実現をめざしている。

「良質のコミュニケーションシステムは競争優位に大きく貢献します。そのためにも、個々のソリューションの効果を最大化させる投資計画を立て、ユニファイドコミュニケーション化にいち早く着手することが重要になるでしょう」と坪井氏は訴える。同社では、豊富な実績に裏打ちされた技術力を強みに、その環境整備を強力に支援していく構えだ。

※1~2 沖電気工業調べ

お問い合わせ

OKI
Open up your dreams

沖電気工業株式会社
TEL: 048-420-7049
URL: http://www.oki.com/jp/IPtel/

図1 OKIのユニファイドコミュニケーション製品の進化



1996年に国内初の企業向けVoIPゲートウェイ「BS1100」を提供して以降(※1)、画期的な製品を続々と市場に投入。ブロードバンド化とリッチメディア化に対応した、より高度なユニファイドコミュニケーションの実現を支援している。